

神護寺文書(四)

一一一 覺眞書狀(寬喜二?、二、三)

(端裏書)「海住山御返事」

高雄山勝示事、寺僧等申狀給候了、可申沙汰之由、申遣藏人左佐許候也、爲主殿寮之沙汰、極安事候歟、此上寺僧、又不可致自由之沙汰候、可待御沙汰候也、恐々謹言、

二月三日

覺眞

一二二 左衛門權佐信盛書狀

(寬喜二?、四、廿七)

神護寺堺事、維任申狀、副供御人、重陳狀、如此候、申入候之處、可進覽之由、被仰下候、所詮重被遣官使、召出兩方古老之輩、可被尋決子細之由、令申候、以其趣、可申沙汰候

歟、内々爲存知、言上候、無左右、拔弃勝示之條、可被行罪科候、堺糺定之後、可有沙汰之樣、先日承存候、糺定如此邊引候者、尙念可有沙汰候歟、又可隨御計候、此等子細、若又可被仰合寺家候哉、以此旨、可令披露給、信盛頓首謹言、

四月廿七日

進上 行任御房

(九)

左衛門權佐信盛

(真書)〇₁「勝示事、左佐供御人、可被行罪科事」

一二三 某書狀(寬喜二?、一、一)

神護寺繪圖并宣下狀一通、昨日自藏人左佐殿、罷預候之間、入于別當御房之見參候、令進上候、可被納寺庫候也、小野人等狼籍罪科有無事、以上人御房仰旨、藏人左佐殿へ、申上候之處、御返事如此候、此繪圖へ、すき候し=

かゝせて候し繪圖にて候也、それに今脇勝示事、并靈心寺事、被注載、(後 欠)

一二四 右衛門少志章常書狀

(一、十二、十三)

自 殿下御所、此圖美禮可令寫進上之由、被仰下候也、御近憐ニハ、繪師候歟、厚紙之美禮ニ可候也、又其後指事不候之間、不參上候、必可參上候、此圖ハ念召候也、恐々謹言、

十二月十三日

右衛門少志章常

謹上 上野法眼御房

一二五 鎌倉幕府下知狀(貞永元、九、廿四)

(端裏書)「福井西保」

下 神護寺領播磨國福井庄西保住人

仰條々

一 下司公文兩職事、

右預所法橋有全與地頭藤原氏代右兵衛尉賴康、遂對決之處、如有全申者、地頭補任以後、庄官等、不從領家之所務、經七箇年之間、申宛新給田於庄官等畢、而地頭

不帶指證文、只以院使久永之私計、備證據之條、胸臆之狀也云々、如賴康陳者、領家久我内大臣家御時、院使久永下向之剋、定置地頭得分之上、左衛門督家御時、於富士御狩御所、蒙御定之後、雖無證文、卅余年色々得分、無相違、其内於庄官職者、兼帶七箇年之後、自領家、宛給新給田之時、可相計之旨、數篇問答之後、庄官等拜領新給田之間、兩方所召任也云々、不帶證文、以久永之計、致沙汰之由、賴康申狀、難信受之處、如有全申狀者、不載自餘事、訴申下司公文給田屋敷許之條、頗雖有疑殆、追東保地頭經光法師之例、可致沙汰之旨、重時朝臣并時盛等、加下知畢、爰東保先例事、無相違、於經年序者、根本給屋敷、何及子細哉者、早任東保之例、可令致沙汰焉、

一 地頭名所當未濟事、

右彼是申狀子細雖多、如兩方所進結解之狀者、參差之

間、難決實否、號地頭名者、永安名也、而以新田恒光

武末有久等、被懸未進於地頭之條、所貽不審也、若令

抑留平民名者、尤可被糺返本名歟、將又爲永安名內者、

不及異儀、所詮早加勘定、可明濟否矣、

一 役夫工米未濟事、

右如問注記者、不載其詞之處、如庄官等申狀者、各雖

有子細、非新儀之由、所見也、仍且任東保之例、且守

舊符、可致沙汰焉、

以前三箇條、大概如斯、此外條々雜事等、雖載巨細之詞、

依無證據之狀、暗難決理非歟、早任東保之例、同可致沙

汰也者、依鎌倉殿仰、下知如件、

貞永元年九月廿四日

武藏守平朝臣(秦時花押)

相模守平朝臣(時房花押)

○裏繼目に花押あり。

一二六 六波羅下知狀(天福元、九、十七)

神護寺領播磨國福井庄西保沙汰人 (并力) 地頭非法條條

一 下司公文給田屋敷事、

右對決預所法橋有全與地頭代右兵衛尉賴康、令進覽申

詞記於關東之處、去貞永元年九月廿四日御下知狀云、

東保先例事、無相違、於經年序者、限本給屋敷、何及

子細乎、早任東保之例、可致沙汰云々、仍任狀、令施

行之處、雜堂則於本給者、不帶一紙證文、雖令押領、

已經年序之間、今更不及訴訟、而東保下司公文之屋敷

者、自昔于今無違亂、令居住者也、又新給田者、爲地

頭押領本給之後、重宛給庄官等、召仕之間、云所職、云

新給屋敷、領家進退顯然也、就東保之例者、可被止西

保地頭之濫妨之地頭、亦於本給屋敷者、地頭進退之由、

事切畢、至新給田者、任東保之例、引募之處、何限當

保、可押落此給田乎、邊迷御下知了見歟、所詮召東

保地頭經光法師、可被糺眞僞也云々、兩方如此加了見

不落居之間、重令言上子細於關東之處、今年四月十九

日御教書云、任兩方申請、守東保之例、可致沙汰之由、

去年九月御成敗畢、然則召問東保地頭經光法師、隨彼

申狀、可被沙汰付云々、任被仰下之旨、相尋經光法師

之處、就彼申狀、同預所覺嚴法眼、又有申旨、其詞參差之間、忽依難裁許、猶可令注進言上關東也、可相待御成敗矣、

一 地頭例損二町七段事、

右如東保預所覺嚴法眼申狀者、送遣勘料馬壹疋菓子等之間、所免除也云々、如地頭經光法師申者、勿論也云々者、止自由之儀、且依先例、且任東保之例、可致沙汰矣、

一 地頭代損田事、

右如同申狀等者、檢注使之任意也云々者、可止自由之募矣、

一 公文算失同例損并下司損田事、

右如同申狀等者、爲領家預所之進退云々者、可依檢注使之免許矣、

一 井料田一町一段事、

右如覺嚴法眼申者、件田者、勸農之時、百姓并行事人等之食料也、爲公文代之沙汰、所徵納也云々、如經光法師申者、當時者、徵納地頭方、勸農之時、任先例、

所下行也、然而非地頭之依怙、何方仁毛被徵納之條、勿論也云々者、守東保、可存知矣、

一 蟲損事、

右經光法師不覺悟之由、令申之處、如覺嚴法眼申者、如此之損亡者、令遂行檢注之時、任見損除之、不然之時者、全不及其沙汰云々者、可依內檢使之裁許矣、

一 今西宮御供田事、

右如經光法師申者、件田地頭一切不相交云々者、守東保、可止地頭之立用矣、

一 同宮修理田事、

右如覺嚴法眼并經光法師等申者、爲官司光高之沙汰、任領家下文、定坪所募來也、於西保者、不知子細云々者、止地頭自由之儀、可依先例矣、

一 役夫工米事、

右如同申狀等者、內宮外宮兩度分、於東保者、已令究濟畢、至于地頭名永安分者、爲地頭方沙汰人包時之沙汰、所責進也云々者、早且任東保之例、且守舊符、致究濟之沙汰、可繼返抄矣、

一 永安名田事、

右如覺嚴法眼申者、本是爲預所名之處、地頭一向押領之、然而於所當者、所辨進領家方也云々、如經光法師申者、令辨濟所當米於領家方之條、勿論也云々者、早守東保、任先例、可全所當年貢矣、

一 寬喜元年以後、地頭名所當未濟事、

右訴論立用田之子細、先條事切畢、早於負名田等者、遂結解、有負累者、任關東御成敗式目、可致其沙汰矣、以前拾壹箇條、且任關東去四月十九日御教書之旨、且就東保地頭所務之例、下知如件、

天福元年九月十七日

○裏繼目に花押二箇づゝあり。

一二七 左少辨兼高奉書(嘉禎元、十、十六)

(端裏書) 磨損の爲め判讀し難し。

神護寺御起請文、經內覽候了、後白河院御手印、尤以嚴重、備中國足守庄大嘗會役、任貞應沙汰之趣、可停止譴責之由、被仰下候了、以此旨、可令漏披露給、仍執達如件、

○⁴ 嘉禎元年

十月十六日

左少辨(花押)
○裏書兼高

一二八 左少辨兼高奉書(嘉禎元、十、廿六)

神護寺領八箇所

丹波國吉富庄

播磨國福井庄

備中國足守庄

若狹國西津庄

寺邊神護寺

紀伊國持田庄

同國河上庄

同國神野眞國庄

右八箇所、大嘗會役、可被免除之狀、如件、

嘉禎元年十月廿六日 左少辨(兼高花押)

一二九 仁和寺宮御教書(仁治二、四、廿一)

當山夏衆、可申寄阿闍梨之由、已爲故上人之素懷、然而
依無便宜、空馳過了、而今寶塔院被寄置阿闍梨、以彼一
口、相傳金堂、所被補夏衆一莠也、各彌勵供花練行之精
勤、可奉祈天長地久之御願之由、可被仰舍之旨、所候也、
仍執啓如件、

「仁治二」
四月廿一日

法眼禎望(九)

謹上 神護寺別當法印御房

一三〇 仁和寺宮御教書案(寬元二、正、十九)

〔端裏書〕紀伊國川上庄事御室御教書案
寬元二、二、三

追申

寺家申狀、副具書、被返獻之候、

神護寺々僧申、紀伊國河上庄間事、寺家申狀、日來沙汰
之趣、無相違候、以此旨、可被申敷之由、御室御氣色

神護寺文書(四)

所候也、仍執達如件、

正月十九日

謹上 相模守殿

法橋在判

一三一 仁和寺宮御教書(寬元三、三、一)

〔端裏書〕孔雀經法御勸賞有職内一口、被寄進當寺御教書、
寬元三年乙巳
覺宗奉

今度孔雀經法御勸賞事、旁有被思食之旨、兩條被申子細
了、其内阿闍梨五口、被奉寄御本尊也、彼五口阿闍梨、
大師御遺跡止住輩、各可應其撰之由、有御心願、神護寺
分一口、早尋其仁、可吹舉申之由、可被仰舍寺僧敷、殊
存道理、可令計申給之旨、御氣色所候也、仍執啓如件、

「寬元三年乙巳」
三月一日

法橋覺宗奉

謹々上 神護寺別當法印御房

一三二 尼念淨讓狀(寶治二、五、廿八)

〔端裏書〕念淨讓于駿川局正文、行印之母儀也

第二十五卷 第四號 一四一

西津御庄 紀氏 相傳庄
にしつのみさうは、きのうちのむは、さうてんのさうに

高雄 御領 起請 参

て候お、たかおのこりやうに、きせいしてまいらせて候、

御武者 孫 孫 孫 念 房 上 覺 上
こ所のむさのまこ、一のまこなればとて、上かくしやう

人 預 職 念 房 其
ニん、あつかり所のしき、ねん上はうに給はり候ぬ、そ

死 孫 駿 河
れかしに候にたれば、又一のまこにて候へは、するかと

殿 局 給 此 文 御 寺 上
のつほねに、たひ候ぬ、この御ふみお、みてらるあけて、

預 職 給 念 房 沙
あつかり所のしき、たまはり候へ、さてねん上はうかさ

汰 参 融 解 意 無 沙 汰
たしまいらせたらむ、ちやうのの、けたいなくさたし

まいらせ給へく候、あなかしこく、

ほうち二ねんさ月廿八日 (花押)

一三三 前石見守友景奉書(建長二、二、廿)

(端裏書)「冷泉殿御文 石見前司奉書」

吉富庄與細川庄、道相論間、院廳御使事、資俊申狀如此

候、何比可差遣之由、可有御下知候哉之旨、可申之旨候

也、以此趣、可令申給候、恐惶謹言、

〇イ
「建長貳年」
二月廿日 前石見守友景奉(裏花押)
進上 佐治左衛門殿

一三四 六波羅下知狀(建長二、二、廿)

(端裏書)「六波羅殿狀吉富通道使者差文」

丹波國吉富庄與細河、相論畧間、路次煩事、石見前司奉

書如此、早任被仰下之旨、相副 院廳御使、可被檢見之

狀、如件、

建長二年二月廿日 左近將監(長時花押)

安富五郎左衛門尉殿

一三五 前石見守友景書狀(建長二、二、廿二)

(端裏書)「石見前司返狀吉富庄與細川庄檢見使問事、二月廿二日」

吉富與細川道相論事、使者來廿六日、被差遣事、承候了、

其由可申沙汰候、但此事、先日令申武家候了、然者、賜

彼御返事、可申之旨、存知候、如何、恐々謹言、

〔建長貳年〕
二月廿二日

前石見守友景

可申之旨候、此由、可令申給候、恐惶謹言、

〔建長貳年〕
二月廿七日

前石見守友景奉〔裏花押〕

進上 佐治左衛門殿

一三六 葉室定嗣奉書禮昏書

〔建長二、二、廿七以前〕

一三八 葉室定嗣奉書〔建長二、二、廿九〕

〔端裏書〕「藤中納言、祇園遷宮守護事、細川御使事」

〔端裏書〕「院宣吉富通道被開圖時、應御使下向遲忌事」

逐言上

細川庄實檢御使事、依爲沙汰人、可差遣召使恒末之由、

廳令申候、然而可相副廳官之旨、之由加下知候了、重恐惶

謹言、

細川庄實檢使事、昨日廳官友國下向之由、廳申上候、而

今武家使申狀等、尤不審候、早可相尋候、凡廳申狀等、

前々不實事等候事候之間、難治候也、定嗣恐惶謹言、

〔建長貳年〕
二月廿九日

定 嗣

一三七 前石見守友景奉書

〔建長二、二、廿七〕

○裏書「中御門藤中納言奉書」

〔端裏書〕「石見前司狀祇園遷宮行事所守護事、細川庄實檢事」

祇園遷宮行事所守護事、在官申狀等、細川庄實檢御使事、藤

中納言家御奉書、如此候、各子細、被載狀候、以此趣、